

TZ ほんの窓

第 6 号 (2005.6.13) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

ウォーター・ウォー - 水戦争 -

「水の惑星」といわれる地球に存在する水の総量は、3600 万 km³。しかし、そのうち淡水は 2.6%、さらに極地の氷床や深度地下水を除くと人間の利用できる水は、水の総量の 0.77% にすぎません。

今世界中でその貴重な水をめぐって、さまざまな問題が起こっています。

世界の水危機

マルク・ド・ヴィリエ『ウォーター：世界水戦争』（鈴木主税、佐々木ナンシー、秀岡尚子訳 共同通信社、2002 年 5100-1059）やジェフリー・ロスフェダー『水をめぐる危険な話：世界の水危機と水戦略』（古草秀子訳 河出書房新社、2002 年 5100-1056）によると、爆発的な人口の増加や産業化された農業による水不足、森林破壊、農業や化学物質による水の汚染、巨大ダムの大規模開発による水系への影響などで、世界各地で深刻な水危機が生じていることがわかります。

また、「これまでの国際紛争は、政治とイデオロギーが原因となっていたが、これからの戦争は経済に不可欠な物質（資源）の獲得と支配が争点となるだろう。」と、アメリカを代表する紛争と安全保障の専門家であるマイケル・T・クレアが、『世界資源戦争』（斉藤裕一訳 廣済堂出版、2002 年 5600-88）で懸念しているように、エネルギー資源ばかりでなく水をめぐる紛争も、いつ勃発しても不思議でない状況に直面しています。

さまざまな要因により安全な水が急速に不足していく現状にあって、一方では水を商品として扱うウォーター・ビジネスが活発になってきました。



水の輸入大国日本

「ヴァーチャル・ウォーター」ということばを聞いたことがあるでしょうか？ 私たちは、日本は水に恵まれた国と思いこんでいます。しかし、食糧自給率 40% にすぎない日本は、実は食糧の輸入という形で水の大量輸入を行っているのです。このように、農作物の栽培あるいはその農作物を餌として牛豚等を飼育するために使用された水のことを「ヴァーチャル・ウォーター」（仮想水、間接水）と呼びます。中村靖彦『ウォーター・ビジネス』（岩波新書、2004 年 0800-33 新赤 878）は、牛丼一杯の陰には 2 トンの水が使用されていると述べ、海外の水事情の悪化がそのまま食糧危機に結びつくような現在の日本の食糧依存に対し警告を發しています。

ボトル・ウォータービジネス

水の商品化と聞いて、すぐに思い当たるのはペットボトルのミネラル・ウォーターでしょう。日本のミネラル・ウォーターの消費量はこの 15 年間で 10 倍以上に増えています。現在日本には 400 社ものボトル・ウォーターメーカーがあり、アメリカでは、ボトル・ウォーターメーカーと市民団体の水争いも起こっています。ボトル・ウォーター市場は国内外でますます熾烈な競争が行われていくでしょう。（中村靖彦 前述書）



水道事業の民営化 - 水は商品か、基本的人権か? -

しかしなんとといっても、現在世界で最も注目されているウォーター・ビジネスは、水道事業の民営化でしょう。現在、水関連企業が提供している水は世界人口の7%に対してであるが、2015年には17%になり、2021年には1兆ドルを超えるビックビジネスになるといわれています。(浜田和幸『ウォーター・マネー：石油から水へ世界覇権戦争』(光文社、2003年)5100-1010)



国際調査ジャーナリスト協会『世界の<水>が支配される! グローバル水企業の恐るべき実態』(佐久間智子訳 作品社、2004年 5100-1054)によれば、世界の三大水企業 スエズ社(仏)、ヴィヴェンディ社(仏)、テムズ・ウォーター社(独・英)が世界中に事業を拡大していています。これらの企業は、世界銀行や国連と手を組み、国際的なシンクタンクやフォーラムなどを創設して水に対する議論を独占し、民営化こそ世界の水問題の解決に有効な手段であるという考えを広めていています。

しかし、一方では民営化が、水道料金の払えない貧困層から水を取り上げ、盗水や汚染された池や川の水を利用せざるを得ないという状況に追い込んでいる事例や、企業と為政者の癒着問題を引きおこしている事例も報告されています。

はたして、水道事業の民営化により安くて安全な水がすべての人に提供されるようになるのでしょうか?

同書の著者は、公共の利益に関わる分野における「監視型ジャーナリズム」を世界的規模で展開するネットワークの調査ジャーナリスト達であり、各国の水を監視・調査し現状を丁寧に取り上げています。

水は、商品なのか、基本的人権なのか? モード・バーロウ、トニー・クラーク『「水」戦争の世紀』(鈴木主税訳 集英社、2003年 5100-993)は、淡水は地球全生物種のものであり、個人の利益のために水を使う権利は誰にもないと述べ、水は「コモンズ(共有財産)」であるということを全世界が了解することによってしか、水を次の世代に残していくことはできないと訴えています。

生命の源の水

最後に、自然のメカニズムのすばらしさ、水がいかにも不思議に満ち貴重な物質であるか実感させる本を紹介します。E.C. ピルー『水の自然誌』(古草秀子訳 河出書房新社、2001年 4500-341)と小出力『地球生命を支配する水 - 水のポプリー -』(裳華房、2002年 4300-216)の2冊です。



水は海から蒸発し、液体となって移動し、時には氷となって停止し、そしてふたたび海へかえる。人間の勝手な取水や汚染など関係なく、ただ淡々と自然の営みを繰り返し、長い時をかけて地球を浄化していく。そのさまは、読む人の胸に自然環境保護の声高な訴えよりも響いてきます。

関連資料

高橋裕『地球の水が危ない』(岩波新書、2003年)0800-33 新赤 827

ヴァンダナ・シヴァ『ウォーター・ウォーズ：水の私有化、汚染そして利益をめぐる』(神尾賢二訳 緑風出版2003年) 5100-1060

水資源協会『第3回世界水フォーラム閣僚級国際会議：その概要と成果』(山海堂、2004年) 5100-1061

森澤眞輔『地球水資源の管理技術』(コロナ社、2003年)5100-922(3)

サンドラ・ポステル『水不足が世界を脅かす』(環境文化創造研究所訳 家の光協会、2000年)6100-761

村上雅博『水の世紀：貧困と紛争の平和的解決に向けて』(日本経済評論社、2003年)5100-1057

ヘザー・L・ピーチ他『国際水紛争事典：流域別データ分析と解決策』(池座剛、寺村ミシェル訳 アサヒビール、2003年)3292-84